

## 法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## 動物表象の文化論的考察 : 日韓比較の視点から

著者	PARK Yukyung
その他のタイトル	A cultural study of animal representations
ページ	1-169
発行年	2017-09-15
学位授与番号	32675甲第405号
学位授与年月日	2017-09-15
学位名	博士(学術)
学位授与機関	法政大学 (Hosei University)
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/13624">http://hdl.handle.net/10114/13624</a>

博士学位論文  
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	PARK Yukyung
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	第 632 号
学位授与の日付	2017 年 9 月 15 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査 教授 坂本 勝 副査 教授 小秋元 段 副査（学外）韓中日比較文化研究所理事長、 梨花女子大学校名誉教授 李 御寧

動物表象の文化論的考察—日韓比較の視点から—

1 はじめに

PARK Yukyung氏提出の学位請求論文『動物表象の文化論的考察—日韓比較の視点から—』は、日本と韓国における動物表象の比較文化的考察を学際的な視野に立つて行うことを目的としている。本論文は、人間と動物の関係史を、古代から現代にいたる通時的な視点からとらえ、今日のグローバル化した時代において、その関係がどのように変化してきたか、そこにどのような意義や問題が存在しているか、といった大きな視野のもとに論を展開している。本論文は以下の目次のもとに構成されている。

序論 日韓における人間と動物の関係に関する研究動向

1. 研究背景と目的
2. 日韓における研究会及び学会の動向
3. 人間と動物の関係に関する先行研究
4. 研究課題と論文の構成

第1章 『三国遺事』における動物表象

1. 『三国遺事』の概要および先行研究
2. 『三国遺事』に登場する動物の種類と分類

第1節 王の誕生と動物

1. 王の誕生に関する動物説話
  - (1) 神と動物から生れる、動物祖先
  - (2) おのずから生まれる、半人半獣
  - (3) 天からの降臨・人卵、卵生

(4) 動物と人間、異類交婚

2. 考察 — 巫歌「創世歌」における人間の誕生を手掛かりに—

第2節 「金現感虎」からみる動物と人間の共存方式

1. 先行研究
2. 内容分析
3. 「異類婚姻」から「誕生」と「再生」へ
4. 対称性と非対称性

第3節 退治される動物

— 「桃花女鼻荊郎」からみる人間の意識の変化—

1. 先行研究
2. 内容分析
3. 異類と異常児と人間
4. 対称性と非対称性

第2章 『禽獣会議録』における動物表象

— 『禽獣会議人類攻撃』と『人類攻撃禽獣国会』との比較を通して—

第1節 『禽獣会議録』の構成と内容

1. 著者安国善について
2. 構成と内容
  - (1) 思想的背景としての「翻案されたキリスト教」
  - (2) 批判内容と当時の社会背景
3. 『禽獣会議録』における動物表象

第2節 『人類攻撃禽獣国会』と『禽獣会議人類攻撃』

1. 著者について
  - (1) 『人類攻撃』の著者、鶴谷外史
  - (2) 『禽獣国会』の著者、田島象二
2. 構成とあらすじ
  - (1) 『人類攻撃』
  - (2) 『禽獣国会』
  - (3) 比較・まとめ
3. 内容分析
  - (1) 人間と動物とは
  - (2) 会議・国会の案件
  - (3) 主な演説内容

第3節 三作品における動物表象

第3章 現代韓国社会における動物表象

第1節 動物広告における動物表象

1. 広告とは、広告と動物
  - (1) 韓国の動物広告
  - (2) 動物広告に関する先行研究
2. 動物広告の分析
  - (1) 1990年代の動物広告
  - (2) 2001～2015年の動物広告
3. 動物広告における表象の考察

#### 第2節 猫に対する認識とその社会的・象徴的意味

1. 韓国における猫に対する認識と先行研究
2. 「韓国人の愛玩動物に関する意識調査」の検討
3. 現代韓国社会と猫に対する認識の変化
  - (1) 人間に喩えられた猫、映画「子猫をお願い」
  - (2) 感情と理想に訴える「浪漫猫」
  - (3) 社会のタブーを語る「屋根部屋の猫」
4. おわりに

### 第4章 日韓における動物表象の比較考察

#### 第1節 自然を背景にした人間と動物の関わり

—『古事記』の動物と『遺事』の動物の比較を通して—

1. 王の誕生と動物
2. 人間と動物の共存方式
3. 退治される動物

#### 第2節 文明を背景にした動物表象

—朝鮮王朝後期と江戸幕府を中心に—

1. 民衆の儒教的価値観の形成と儒学者の動物観
 

—「万物平等主義」と「エリート主義」
2. 「生類憐みの令」からみる「生類意識」と「人倫意識」
3. まとめ

#### 第3節 現代社会における動物表象

—「動物性抜きの動物」動物キャラクター—

1. 韓国のキャラクターの諸様
2. キャラクター大国日本の「ゆるキャラ」
3. 八百万の神とキャラクター

#### 結論

1. 日韓における普遍性としての動物表象
2. 日韓比較視点からの動物表象
3. 研究意義と今後の課題

【引用・参考文献】

## 2 論文の概要

以下に各章の概要を略記する。まず、序論においては、当該研究分野について日本と韓国における先行研究を整理している。日本における人間と動物の関係に関する研究は1990年代に本格的に始まり、その研究はきわめて広範囲な問題意識を含む学際的研究として展開されている。とりわけ、現代社会において人間と動物はどのように関わり、そこからどのような新たな人間観・動物観を構築していくことが可能かといった、きわめて今日的な問題に向かって研究が展開されている状況が示される。韓国においては、2000年代に入ってこうしたテーマが本格的に議論されるようになる。韓国における研究の動向は、民族の歴史や文化を中心とする傾向を持ちつつも、同時に、東アジアの全体の文化コードを読み解こうとする比較文化的研究の重要性も意識されるようになった。そうした中であって、著者は当該テーマに関する日本と韓国の実証的な比較研究はまだ緒に就いたばかりであり、今後の重要な研究分野であることを確認する。

第1章では、まず、今日における人間と動物の関係がどのような歴史的な推移の中で生み出されてきたのか、そのための具体的な事例調査の一つとして、まずは通時的観点から、古代における韓国の動物表象を明らかにする。具体的には『三国遺事』における動物表象を、人間の誕生、動物との共存方式、動物退治という3つの視点から考察する。当該章では、同書に記述されるすべての動物関係の説話や関連記事を網羅的に読み解き、『三国遺事』の世界においては、動物は神的世界を背景にした憧れの対象であり、また信仰の対象として、人間の始原や王の超越性と深く結びついていることを明らかにする。

第2章では、韓国の近代開花期における動物小説の代表作である『禽獣会議録』と、日本の『禽獣会議人類攻撃』『人類攻撃禽獣国会』を比較分析し、近代における動物表象の一例を考察する。日本も韓国もともに近代化の時代を迎える中で、人間と動物の関係は、かつての自然を背景とした中で作り出されてきた関係から、徐々に、人間による新たな秩序に基づく世界を背景とした関係に変化していることが論じられる。かつては神的存在として人間と世界をつなぐ重要な他者であった動物は、当該作品においては、人間を語るための道具的な存在として登場し、その地位は大きく変化している。また、3つの作品は、そうした近代化によるさまざまな矛盾や問題に気づこうとしない人間たちを動物の演説によって批判するという共通の枠組みを持ちながらも、韓国のテキストには、儒教的な道德観念が強く表れており、仏教的思想やあらゆる存在に靈性を見ようとする傾向を内在させている日本のテキストとの違いが認められると指摘する。

第3章では、現代における動物表象を考察するために、主に韓国における動物を使用した広告を対象に論ずる。韓国では1990年代以降、愛玩動物を飼う人が増加し、広告作品に動物が用いられることも確実に増加した。そうした時代の変化を踏まえて、本章においては、広告における動物の役割や現れ方を分析し、そこから読み取ることができる現代韓国の動物観を明らかにしようとする。広告から読み取りうる動物表象は、基本的に、人間に親しみやすく、人間との同質性が感じられるイメージによって成り立つが、それらは動物本来の性質を

抜き取った「動物性抜きの動物」として商品化されたイメージであり、そのように商品化された動物は、生産と消費を繰り返す現代消費社会の一面を映し出していると論じている。

また本章第2節では、現代韓国における人間と動物の関係の変化をもっともはっきり示している動物として猫を取り上げる。かつて韓国の伝統社会においては、猫は、気難しく、気味の悪い、仕返しをする動物などとして、おもに負のイメージをもって見られることが多かった。しかし近年、若者を中心に猫に対する見方に変化が生まれ、猫を愛玩動物として飼育する人も急増している。そうしたことを背景に、若者を中心に生まれている猫に対する認識の変化が何を意味しているのか、それを現代韓国社会の問題として明らかにする。具体的には、大衆的な人気を博した映画「子猫をお願い」、大衆歌謡「浪漫猫」、テレビドラマ「屋根部屋の猫」を分析対象に、そこから読み取れる猫と人間の関係の変化を考察する。猫に対する既成世代の伝統的な見方の背景には、家を中心とする儒教的な道德観念があり、それに対して若者たちは、既成世代の観念に捕らわれない、型にはまらない個人を重視する考え方に変化してきている。そこにはかつて負のイメージで見られていた猫に自分たちの生き方を重ねて、新たな時代を生きようとする若者たちの台頭がある。猫の表象の変化は、そうした時代の変化を見事に描き出している。

第4章では、第1章から第3章までの考察を踏まえ、あらためて日本と韓国における動物表象の比較を行う。第1節では、『三国遺事』における動物表象と『古事記』における動物表象を比較検討する。この両者には共通して、人間と動物が調和を保って共存する関係への志向が存在しており、それらは古代における自然と人間の共存関係を象徴するものであることを論じる。第2節では、近代以前の動物と人間の関係を読み解く作業の一環として、江戸幕府の「生類憐みの令」と朝鮮後期の儒学者の世界観から、動物の殺生と肉食の問題を取り上げて比較検討する。「生類憐みの令」は仏教的な「生類意識」と儒教的な「人倫意識」をもって動物の殺生と肉食に関する策を施した。それはさまざまな思想や観念をフレキシブルに受容する江戸時代の文化の性格をよく表している。それに対して、朝鮮の儒学者は「万物平等主義」と「エリート主義」に基づき、民衆も動物も「孝」に基づく理想的な道德価値観へと導くものと位置づけられる。そこには強固な儒教的道德価値観があると指摘する。

第3節では、日本と韓国における動物キャラクター文化を論じる。「ゆるキャラ」を含めて現代の動物キャラクター文化においては、動物は人間との異質性が抜かれ（統制され）、擬人化されて表象されている。日本の場合は、そうした動物に親近感を表すキャラクター文化は、動物を神として祭る民俗文化や伝統的なフレキシブルな思考にも支えられて広範な広がりを見せている。一方韓国においては、今日においてもなお儒教的絶対的価値観が強く残っており、動物キャラクター文化の広がりは一時的なものである。そこには、動物は人間が「仁」を施すべき対象でありながらも、家畜として人間に飼われ食べられる存在であるとの認識が強く残っていることが考えられると論じている。

最後に結論として、以上に述べた各章の要点を再確認し、以下のように述べる。かつて自然の中に生命の源泉を求めていた人間は、動物との関係において、その自然とのつなが

りに特別な意味を与え、一方だけが優位の立場にいるのではない「対称性思考」の中で共存していた。しかし、その人間と動物の関係は、世俗化・合理化し個別化していく。こうした一連の流れを形象化するのが動物表象であり、動物はそれぞれの時間と空間の中でさまざまな役割を負って表象（representation）され一再び現れている。そのうえで、日本と韓国の動物表象の違いには、それぞれが作り上げてきた思想的・文化的・歴史的な背景の相違が影響しており、従来からもしばしば指摘されている日本文化のフレキシビリティ（柔軟性）と韓国の儒教的な絶対的価値観の存在があることを再確認する。

### 3 総合的評価

上記に略記した論文内容について、評価すべき点と課題について述べる。

序論において当該研究分野における先行研究を丁寧に整理し、今後の課題を明確に示そうとしている点はまず評価すべきであろう。序論に限らず、当該論文は各章においてこうした先行研究についての確認作業をまず行っている。もとより、本論文が各章において扱っている研究対象は、古代の説話から現代の広告まで、時代も表現方法も異なるものであり、それぞれの分野において確認すべき先行研究が多いことはいうまでもないが、それらを論旨に沿って一つ一つ確認しながら自らの論を展開するという手続きは、学術研究の基本であり、博士論文執筆の態度としてやはり評価すべきである。そのうえで、各章の内容について述べると、第1章の『三国遺事』の説話分析から導かれる古代的な人間と動物との関係の析出は、近代、現代へと展開する本論全体の表象分析の基点となるものである。もちろん、ここで著者が取り上げた説話は多岐にわたり、それぞれの説話が独自の意味を担っており、それらを一概に同一の原理で説明することには方法的な困難が伴う。そうした個別の問題を普遍的な意味へと展開するために、著者はいくつかの分析概念を引用する。たとえば「対称性思考」と「非対称性思考」、「欠損」と「充足」、「融合」と「調和」などの概念を用いて、著者は個別分析からえられた結果をより普遍的なものへと意味づけていく。その分析は一定の有効性を発揮しており、論文の意味を明確にする方向に働いているが、それぞれの概念はそれぞれに独自の方法的な意義を有しているはずであり、分析概念として依拠する際には、その点についてもより明確な意味づけをすることが望ましいのではなかろうか。今後の課題として指摘しておきたい。

第2章では、近代開花期の3つの動物小説を取り上げ、日本と韓国の動物表象の共通性と異質性を指摘する。もとよりその共通性は、韓国の『禽獸會議録』が日本の作品の翻案的要素が強いことが指摘されており、そこから必然的に生じる問題であろうが、著者はその表面的な共通性の背後にある相違点を明らかにした。その相違の背景には、日本と韓国がおかれていた近代化の状況の相違や、思想的価値観の違いがあり、それらは近代以降の動物観においても明瞭に表れていることを明示した。その点も重要な指摘として評価すべきであろう。ただ、その小説の枠組み自体はあくまでも寓話的な意味をもって作られているものであるから、その方法を、動物表象一般の問題に適用還元することにはやや慎重な

手続きが必要ではなかろうか。また、ここで扱っている作品は、第 1 章の『三国遺事』や第 3 章の現代の広告とはやや異なって、作者が判明している近代の作品であり、著者が 1 章と 3 章で取り上げた分析対象をともに「集団の語り」と位置づけたものとはやはり異質であろう。比較研究における資料性の問題として今後検討すべきこととして指摘をしたい。

第 3 章は、内容的には本論文の中心に位置すべき章である。通時的視点から追求してきた日本と韓国における動物表象の違いが、グローバル化した今日において明確に存在することを明らかにした。その点は、本論文全体の意義に関わるものとして高く評価したい。広告という膨大な数の分析対象を丹念に実証的に調査分析して、前記のような一定の結論に達したことは評価すべきである。とくに現代韓国における猫の表象分析は、従来指摘していなかった問題を明確に提示した労作である。ここで明らかにした現代韓国の若者たちの生き方は、人間と動物との今日的な関係を象徴しており、また今後の人と動物の関りを考える上でも示唆を与える意味を持つものと考えられる。

第 4 章は全体のまとめという意味に加えて、新たに「文明を背景とした動物表象」の節を立て、「生類憐みの令」と朝鮮後期の儒学者の思想を取り上げている。この両者についてここで整理されている問題は、すでに先行研究において明らかにされている部分が多いが、その双方を比較して、当該テーマの歴史的思想的背景を明らかにした点は評価したい。ただ、第 2 章について指摘したように、ここでも比較材料の資料性についてももう少し慎重な吟味が必要ではなかったかと思う。ある特定の時代の法令や制度と儒学者の思想は、やはりその資料的な位相が異なるものであろう。比較文化研究の意味をより意識的に発展させるためにも、著者の今後の課題として指摘したい。

#### 4 結論

著者が研究テーマとした動物表象の比較文化論的研究は、今日、学界だけでなく人類全体の文明の問題としてきわめて重要なテーマになりつつある。バイオフィリア（生命に対する愛情）ならびにメカフィリア（機械に対する愛情）へと、人類の関心が大きく移行している現代の世界において、著者が立てた研究テーマは、まさに重要な今日的な意義を持つ。そのうえで、本論文は通時的な視点から人と動物の関係にある背景史を簡潔にまとめ、その結果、日本と韓国における動物表象は、過去における相違よりもグローバル化した現代において顕著な相違を見せていることを明らかにした。その点が最大の功績である。ただ、その結論にいたる比較テキストの選択、用語や方法論上の問題は、前記にも指摘したようになお存在している。また、著者が目指そうとしている「学際的研究」についても、本論文において十分にその方法を生かすことができたかという点について再考の余地がある。新たな「学際的研究」を目指すのであれば、従来の比較文化研究のもっている長所や短所を明確に自覚し、それらを乗り越えることができる新しい方法としての「学際」研究の意味や方法をより深く考えることが必要であろう。もとより、そうした課題は今後新たな研究を進めていくうえで、より有意義な成果をもたらすための検討課題であり、本論



文が達成した学問的な価値を損なうものではない。したがって、本審査小委員会はPARK Yu kyung氏提出の論文『動物表象の文化論的考察—日韓比較の視点から—』を上記のように評価し、同氏が博士（学術）の学位を授与される資格を有するものであるとの結論に達した。